

『国際政治経済学要論—学際知の挑戦—』晃洋書房、2010年、からの若干の問題提起  
関下 稔（立命館大学）1. 国際政治経済学（International Political Economy, IPE）に関する三つの著書（計画も含めて）に関して

- 1) 『国際政治経済学要論—学際知の挑戦—』（以下『要論』）2010年、晃洋書房  
・基本的な原理、学説、内容等について概括的なことを扱った後で、主なケーススタディ（IT、サービス化、貿易摩擦、競争力強化）を取り上げて、詳細に展開。
  - 2) 『国際政治経済学の新機軸—スーパーキャピタリズムの世界—』（以下『新機軸』）2009年、晃洋書房  
・消費、欲望、イメージ、ブランド、ハリウッドビジネスなど広く文化や知識に関わることに焦点を当てて、21世紀の世界の政治経済を展望。  
・これについては「知識資本の時代」（関下、中川編『知識資本の国際政治経済学』第1章）で、知識取扱い資本と知識労働者について補完。
  - 3) 『日米政治経済論—アメリカの覇権と「体制的従属国」の帰趨—』（仮題）  
・日本にとっての重石である対米関係を政治、経済、文化・イデオロギーの側面から総合的に取り上げる予定。「日米同盟」のイデオロギー：その虚構と未来
2. 若干の論点について：書評でのレビューや各種コメントを基にして
- 書評：①森原康仁「国際政治経済学の方法論」2011. 1. 22 日米中政治経済研究会、②石黒馨『世界経済評論』2011年7/8月号、③桜井公人『国際経済』（予定）④献本に対するコメント（多数）
- 1) 政治と経済の相互作用（政治・経済・イデオロギーの三位一体化・・・コックス）の中身の明確化の必要・・・複合性・総合化の内容
  - 2) 政治と経済との間の優劣、序列、整合性の原理的把握（ケースバイケースではなく）
  - 3) ネオリベラリズムへの接近に繋がらないか
  - 4) IPEの批判的摂取のエッセンスは何か（覇権安定論、国際レジーム論との対比で）
  - 5) 現代世界経済を解明する鍵・・・体制、段階、統合原理からの異質性と覇権国による組織化の持つ意味
  - 6) 「ポストアメリカングローバリズム」の意味は？
  - 7) スーパーキャピタリズムによる中国評価は妥当か？
  - 8) グローバリティのフェイズⅢでの国家の役割
  - 9) オールタナティブの展望（特に知の役割について）
3. 国際政治経済学で目指しているもの—IPE批判をとおして
- 1) 国家論・・・政治、経済、文化・イデオロギーの交差・接点と独自領域の浮揚：「学際知」（マルチディシプリナリーとインターディシプリナリー）、複合性（多次元性）、総合性（秩序だった序列と相互関係と立体的な構造物とダイナミックな運動）  
・・・マルクスの三つの著作（『資本論』、『ルイ・ナポレオンのブリュメール18日』、『ドイツイデオロギー』）の位置と関係、あるいはレーニンの『遠方からの手紙』から『国家と革命』に至る13本の論文の意味するもの
  - 2) 科学の発展と総合的共同研究（インターセクション、インターオペラビリティ、コ

ラボレーション、コクリエーション、シンバイオティック)の含意するもの(「イノベートアメリカ」の射程・第11章)

3) I P Eの基本性格・三つの潮流(主流としてのネオリアリストと補完的役割としてのネオリベラル、それらに対抗的なクリティカルセオリー)

- ①国際的統治の学(体制間対抗下での覇権国システムに基づく現状維持と、場合によっては逆襲と変更までも視野にいれて)
- ②政治による経済の包摂化とそのための術策の案出・事態を政治から説明し、政治に収斂させる手管、そのためのもっともらしい「政治過程論」(実は政策決定過程や政治交渉日程や要人の関係図の仰々しい説明に終始)を「(政治)科学的」と呼称する厚かましき
- ③したがって、「(政治的)現実主義」と称する現状維持策が当然の帰結になる。
- ④これを批判理論を基礎にして、ひっくり返すことが大切な役割(課題)になる  
その際に、ネオグラムシアン(コックス、ギル等)の政治・経済・イデオロギーの三位一体的把握とヘゲモニー(覇権国による領導とそれへの信従または黙従(conformity)発揮は有効なヒントとなる。

4) 近代国家の変遷

- ①国民国家(ネーションステート、ソヴリンティ)・近代の民族形成と国家確立、国民国家体制・ウェストファリア体制、帝国主義と植民地体制、民族解放運動と民族国家(ナショナリズム)、体制間対抗と民族紛争(宗教的、イデオロギー的)
- ②グローバリゼーションの進展と「経済国家」機能
- ③21世紀世界・国家破綻(覇権国を含めて)
- ④スーパナショナリズム(地域共同体、連邦化)とインフラナショナリズム(分離・独立、自治権拡大)での国民国家の止揚ないしは変更。世界連邦の道は?

5) 経済問題の「政治化」と政治と経済の相互作用、複合性の設定、それを解くための整序された枠組みと序列の提示・貿易摩擦、マクロ経済調整、通貨、技術移転、軍事、移民、コーポレートガバナンス

- ①アクター・国家、多国籍企業、金融権力、国際機関などの「制度」のもつパワー
- ②マルチレベルゲームと具体的事例の探求(特に企業統治とそのシステム・「大陸型」と「アングロサクソン型」、スタンダード)
- ③国際レジーム(ルール、プリンシプル、ノーム、プロシージャ)の役割
- ④パワーシフト・軍事→経済→知、「知」はパワーを超えたものになりうるか
- ⑤政治統治(民主主義か強権・独裁か)、経済的富(自由化・開放化か国家主義的規制と助成か)、市民生活(人権擁護か監視か)
- ⑥イデオロギー・文化面の重要性の台頭(知の持つ意味のパワー理解ではなしに)
- ⑦「知識取扱い資本」と知識労働、その将来性
- ⑧資本の支配・株式会社、コーポレートガバナンス、経営者の二つの機能(資本の管理と経営管理)と二重性、私有財産制(「資本と営業の自由」)

6) 「体勢的従属国」としての日本の特別の地位

- ①形式的独立国家形成と「政治的従属」の諸相・・覇権国アメリカを支える最大の支柱、アジアへの「ナショナリズム」の鼓吹とアメリカへの同盟国強化という名目での国益の喪失・・この欺瞞性と転倒性とアナクロニズム
- ②沖縄返還の欺瞞性（「核抜き本土並み」）、密約と従属の深化
- ③3. 11後の「友だち作戦」（「体積的従属」化の一層の深化
- ④「親米派」（日本）と「親日家」（米）のインナーサークルの深層

#### 7) オバマ政権の格闘とその限界

- ①ビンラディン殺害・・軍事主導、介入・関与・侵略
- ②財政赤字の拡大、国債上限の撤廃、格付けの格下げ・・ドル体制の崩壊過程
- ③アラブ世界の激変とスマートパワー外交（協調と関与、軍事力行使と外交交渉との組み合わせ、パブリックディプロマシー、グローバル開発、エネルギー、気候変動）の成否
- ④雇用、医療保険、金融、貿易（国際収支）、中小企業振興、FDI、サービス経済化、イノベーション、スマートグリッド（「グリーンディール」）
- ⑤「アメリカ愛国者法」の延長・・監視社会とアメリカ国民の自由の制限

#### 8) 未来世界への希望

- ①グローバル化と脱国民国家化、②市民社会の諸原則からの発展（共生・共創・共存・共有）、③叡智と博愛

#### 【その他の拙稿関連文献】

1. 「21世紀アメリカの競争力強化思想の旋回ー「イノベートアメリカ」の深層に迫るー」『立命館国際研究』23巻1号、2010. 6
2. 「21世紀アメリカ先端産業の焦燥と希望と模索ー「アメリカ競争力法」への多様な道りを探るー」『立命館国際研究』23巻2号、2010. 10
3. 「R&D投資の国際化と多国籍企業の海外子会社ーグローバル時代の時代の技術の「秘匿」と「伝播」の二面戦略の新展開ー」関東学院大学経済学研究論集『経済系』第246集、2011. 1
4. アメリカ多国籍企業の科学技術・管理・サービス労働者のグローバルな展開と業務展開ーH-1B/L-1ビザの利用とオフショアアウトソーシング活動の功罪を考えるー（一）『立命館国際研究』23巻3号、2011. 3、同（二）『立命館国際研究』23巻3号、2011. 6
5. 「知識資本の時代」関下稔、中川涼司編『知識資本の国際政治経済学ー知識・情報・ビジネスモデルのグローバルダイナミズムー』第1章、同友館、2010年
6. 「21世紀の多国籍企業概説ー日ー米ー中トライアングル関係の経済的基軸を考えるー」『立命館国際地域研究』34号、2011. 10
7. 「21世紀の多国籍企業の企業内貿易の特徴とその含意ーUSDIA2004とFDIUS2002の比較をもとにー」『立命館国際研究』24巻2号、2011. 11
8. 「21世紀の多国籍企業の研究開発投資とその果実ーUSDIA2004とFDIUS2002の比較をもとにー」『立命館国際地域研究』35号、2011. 12
9. 「21世紀アメリカ多国籍企業の全体構造ーUSDIA2004が示すものー」『立命館国際研究』24巻3号、2012. 3（執筆中）